

「先輩方、明日は大急ぎでA R I Aカンパニーを片付けちゃいましょう」

「がんばろ、藍華ちゃん。アリスちゃん」

灯里が頑張つてA R I Aカンパニーの片付け作業をしようと決意していると、突然アリア社長が、むくつと目を覚ました。

「ぷ。ぷ。ぷいにゆ〜」

「アリア社長どうしたんですか？」

少し慌てた様子のアリア社長は、何か水面の方向を指さしているように見える。

「ぷ。ぷいにゆ〜」

灯里がなんだろうと思ひ、アリア社長が指す方向を見ても何か水路を流れているよ
うで、ぷかぷかと浮いているものがあつた。

「あれ、なんだろう？ 藍華ちゃん、もう少し右いってみて」

「もう灯里つたらしょうがないわね」

ゴンドラの向きが少し変わつて、水面を流れている何かの方へと少しずつ近づいてゆく。

「これ、ビンみたい」

「ぷいにゆり〜」

流れている物の正体は、どうやら小瓶こびんのようだ。

「アリア社長。あれを拾うんですか？」

「にゅい」

「藍華ちゃん。お願いもう少し近くに寄せて」

「でっかいゴミじゃないんですか？」

「ぷいにゅ」

アリスの問いかけにアリア社長は首を横に振っている。どうやらゴミではないようだ。

「オーライ、オーライ」

灯里が手を伸ばすと透明なガラスでできた小瓶をキャッチした。

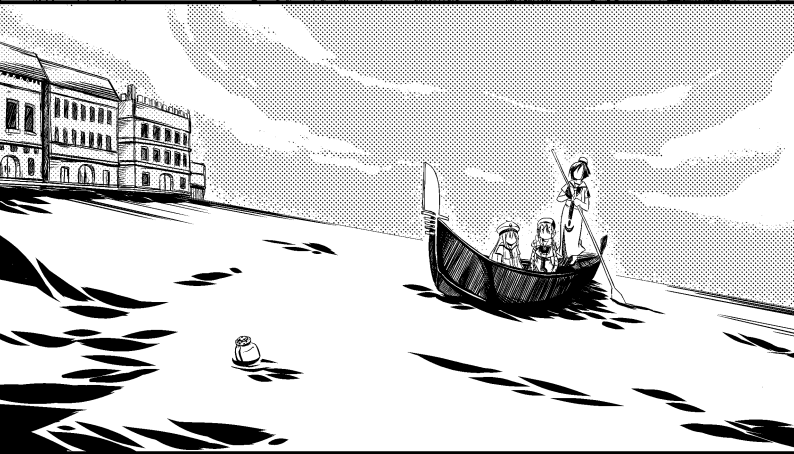
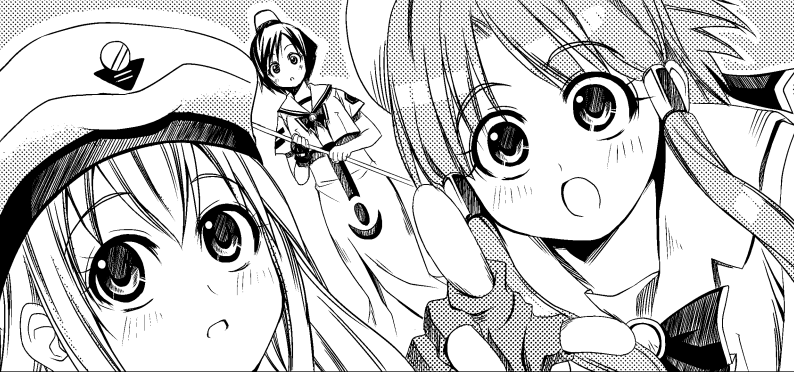
「と、とつたー！」

「灯里先輩。お見事です」

「灯里、なーにそれ？」

水路に流れていた小瓶を灯里はまじまじと見つめる。小瓶の大きさは手のひらに乗るぐらいで、中には手紙らしき白い紙の様なものが入っており、フタのところにはコルクでぎっちり封がされていた。

「うーん。なんだろう？中には手紙が入っているみたいだけど……アリア社長、これなんですか？」



「ふう、ふういにゆる。ふういにゆりー、ふう、ふういにゆ」

灯里はアリア社長に小瓶を見せると、アリア社長は、身振り手振りで何かを説明しているようだった。

「アリア社長、わからないです」

「でっかい謎な小瓶を拾いましたね」

「うん」

「灯里、中に入っているのは手紙？」

「うん。手紙みたいだけど……これどうしよう……」

「そうよね。それ、どこから流れてきたのかしら？」

藍華が、不思議そうな顔でゴンドラを漕ぎながら言った。

「ネオ・ヴェネツィアで手紙を届けるならポストを使えばいいですし」

「うん。そうだよねアリスちゃん」

「それにしても、瓶の中の手紙なんて。なんだかロマンチックよね。きっと伝えられない誰かの思いが書いてあるのよ」

「藍華先輩、瓶の中の手紙と言えば……SOSって書いてあって誰かが遭難したときのメッセージが入っているっていう相場が決まってるんです！」

「えー遭難！」

灯里が遭難と聞いて、少し驚いた。

「こんな街のど真ん中に流れていた小瓶よ。この辺で遭難するって、どこで遭難するのよ」
「確かに、遭難するような場所はないよね」

灯里は落ち着きを取り戻しながら、考えてみると確かに遭難しそうな場所はない。

「灯里、瓶をあけてみたら？中身気にならない？」

「うん。気になるけど、開けても良いのかな？手紙みたいだけど」

灯里が封を開けようかどうか迷っていると、アリア社長が灯里の側にやってきた。

「ふ、ふいにゆ〜」

「社長。開けても良いんですか？」

「ふいにゆ」

「なんか開けると言ってるみたいですね」

アリスが興味津々といった様子で言った。

「分かりました社長。水無灯里、小瓶のフタを開けさせていただきます」

黒いゴンドラに乗っていた一同が、灯里の手元に視線を集めるのだった。